

所蔵資料展示

本草学から博物学へ

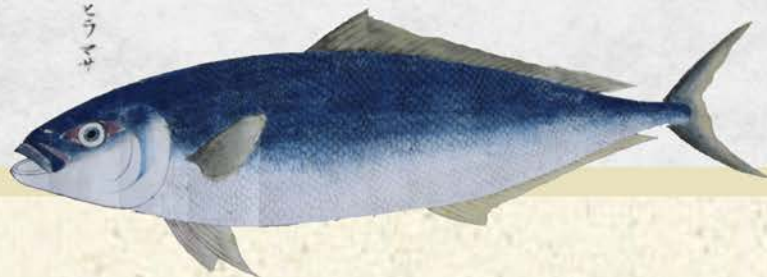
平成二十七年一月三日（木）～二月九日（火）

『本草図譜』



くまのりん

あぶら



とらや

[魚類図]

三重大学附属図書館

— ごあいさつ —

三重大学附属図書館は、館蔵貴重資料のうち、本草学と博物学に関係するものを14点選び、所蔵資料展示「本草学から博物学へ」として、公開することにいたしました。

本草学とは、主として薬用となる植物・動物・鉱物を研究する学問で、とくに植物を対象としました。中国で生まれた学問ですが、奈良時代には日本に移入され、江戸時代に貝原益軒など国内の学者の努力もあって、めざましい発展を遂げました。明治以降は、ヨーロッパ由来の博物学へと移行し、小学校からの理科教育に採用され、動植物の知識は国民にあまねく教授されることとなります。

三重大学の前身は、生物資源学部につながる農林専門学校と教育学部につながる師範学校でした。展示の書籍のうち、本草に関する書籍は農林専門学校のものが多く、博物学に関する書籍は師範学校からの本が多いです。いずれも日本における自然科学の発展を示す好資料であり、また三重大学の沿革をよく示すものです。

なお今回の展示は、三重大学附属図書館の和本整理事業の一環です。

それでは、本展示を通じて、いつの時代も変わらない自然への関心を感じていただければと思います。

平成27年12月 三重大学附属図書館長 加納 哲

【展示凡例】

書名、読み（ひらがな）、ジャンル、刊・写、書型（サイズ）、巻冊数、編著者名、序跋者、刊行・成立年、版元（出版地）、旧所蔵元、架蔵番号、項目担当者名の順で記述。

— 本草学から博物学へ —



本草とは

本草学は中国の薬物学で、薬用とする植物、動物、鉱物についてその形態や効能などを研究するものでした。日本でも中国から『本草綱目』が輸入されて以降本草学が注目を集め、特に吉宗の時代、海外の薬や砂糖などを輸入することによる金銀の流出を抑えるための海外産植物の国産化の試みや、動植物の和名と漢名のすり合わせを通じて発展しました。また、園芸や貝集めの本、俳人のための植物図鑑などの趣味の本も多く刊行されており、本草学が民衆にも広く親しまれていた様子がうかがえます。(稲本紀佳)

1. 大和本草 やまとほんぞう

本草、刊、半紙本縦 22.5×横 16.1 糎、16 卷・付録 2 卷・諸品図 3 卷 19 冊 (14 卷欠)、貝原益軒著、宝永 6 年 (1709) 刊、(京都) 永田調兵衛版、三重高等農林学校旧蔵、499.9/Ka21。

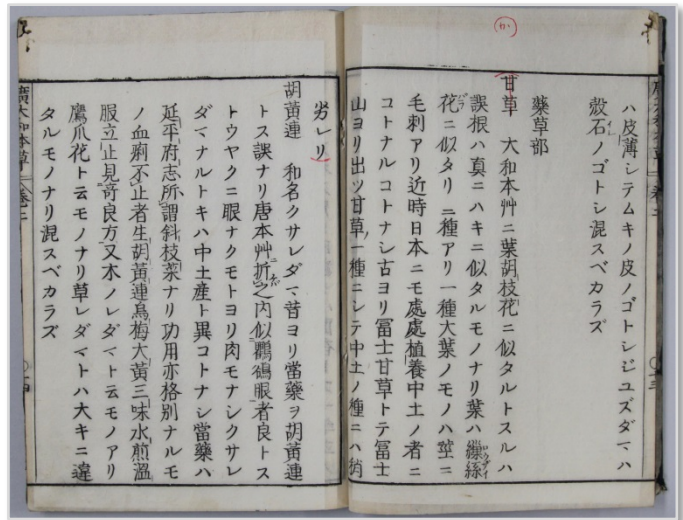
中国本草学の集大成である明の李時珍『本草綱目』(1596) を土台に、和漢の本草について名称や来歴、形状、効用などを記述した書。日本産動植物を多く収録し、日本独自の本草学の先駆的書。本篇は宝永 5 年成立、同 6 年刊だが、付録と諸品図は正徳 5 年 (1715) 刊である。展示箇所は「諸品図」下の介類 (貝類)。左上の「カタカイ」はアワビのような一枚貝。左下「カブトガニ」は「蟹魚 (ウンキウ)」。本館には『大和本草綱目』(目録と 1 巻から 4 巻まで、架蔵番号 499.9/ka21/1~5、三重県師範学校旧蔵) という別題後印本も収蔵されている。(稲本)



2. 広大和本草 こうやまとほんぞう

本草、刊、半紙本縦 22.5×横 15.9 糎、10 巻別録 2 巻 12 冊、直海元周著、宝暦 9 年(1759) 刊、(京都) 永田調兵衛版、三重高等農林学校旧蔵、499.9/Na49

植物や鉱物などの本草を石部、花部、雑草部などの部に分類し、形状や色などを説明しているほか、和名や俗名、方言名などを記載している。挿絵なし。展示部分は巻 2「薬草部」の「甘草」「胡黄連」。「甘草」は漢方薬で大変よく使われる原材料。1.『大和本草』の誤りを正す。「胡黄連」(こおうれん)も生薬で「クサレダマ」という和名を記す。(稲本)



3. 本草綱目訳説ほんぞうこうもくやくせつ

本草、写、半紙本縦 24.2×横 17.0 糎、52 巻(1~4 巻欠)、小野蘭山口授、石田熙筆受、成立年不明、三重高等農林学校・南条文庫旧蔵、499.9/O67。

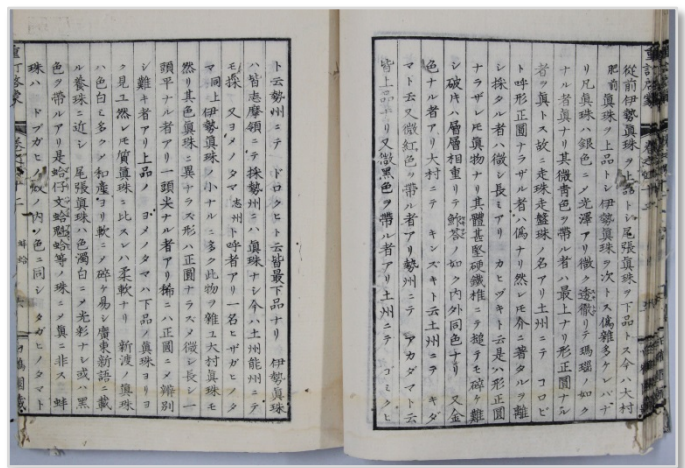
日本の本草学の集大成者といわれる小野蘭山(1729-1810)の講義の筆録。これをもとに 4.『重訂本草綱目啓蒙』などの本が作られた。刊本はないが写本は大量に流布していた。本書の題簽は刷り題簽で、「新校正本草記聞」と記す。展示箇所は草部山草類上の人参。今でいう人参は「胡蘿蔔」と呼ばれ、当世人参といえは薬用種をさす。人参の解説で 9 丁(18 頁)を費やしており、日本産では熊野産が上物と記す。朝鮮伝来の孩児参がひとがたで雌雄あるとし、図がそれにあたる。(稲本)



4. 重訂本草綱目啓蒙 じゅうていほんぞうこうもくけいもう

本草、刊、半紙本縦 25.7×横 17.5 糎、48 巻 20 冊、小野蘭山口授、小野職孝録、井口望之訂、弘化 4 年(1847)刊、(江戸)和泉屋善兵衛他 8 軒版、三重県師範学校旧蔵、461/1/18。

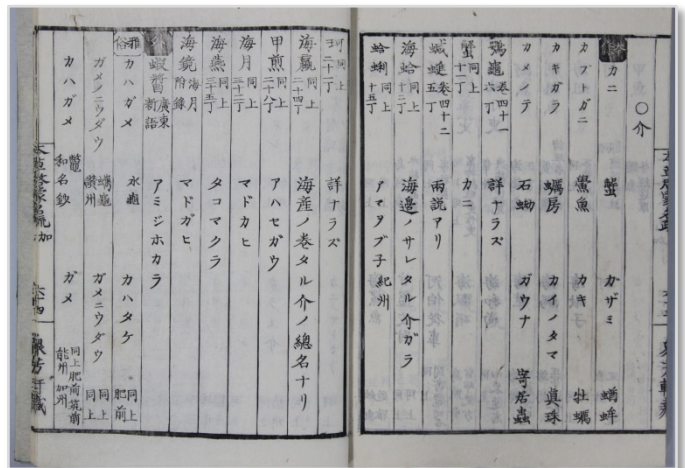
江戸時代を代表する百科事典の本草学書。小野職孝が祖父蘭山の講義筆記を編集したものの『本草綱目』の解説書であり、動・植・鉱物に関して国産のもの解説が多く付け加えられた。和漢の古書を多く参考にし、また蘭山の実見が反映した大著である。挿絵はないが、和文で内容はわかりやすい。初版は享和 3 年(1803)から文化 3 年(1806)に刊行。再版は文化 8 年、重修版は弘化元年(1844)、重訂版は弘化 4 年刊。展示本は岸和田藩侍医井口望之による重訂本。井口はのちに「山草部」に関し『本草綱目啓蒙図譜』(1849)を著した。展示箇所は巻 42 介部蚌蛤類の「真珠」。以前は伊勢真珠(志摩産真珠)が上物とされてきたが、偽物が多く、今は長崎の大村産真珠が上物であるとする。方言を多く収録したのも本書の特徴で、土地ごとの真珠の様々な異名が載る。(吉丸雄哉)



5. 本草啓蒙名疏 ほんぞうけいもうめいそ

本草、刊、半紙本縦 22.4×横 15.6 糎、7 巻 8 冊(存 1 巻から 4 巻)、小野蘭山鑑定 小野職孝編、屋代弘賢序、小野蕙畝(職孝)・佐伯職孝凡例、文化 6 年(1809)刊、版元不明(見返し「板貯衆芳軒之書蔵」)、三重高等農林学校旧蔵、499.9/H85/1-4。

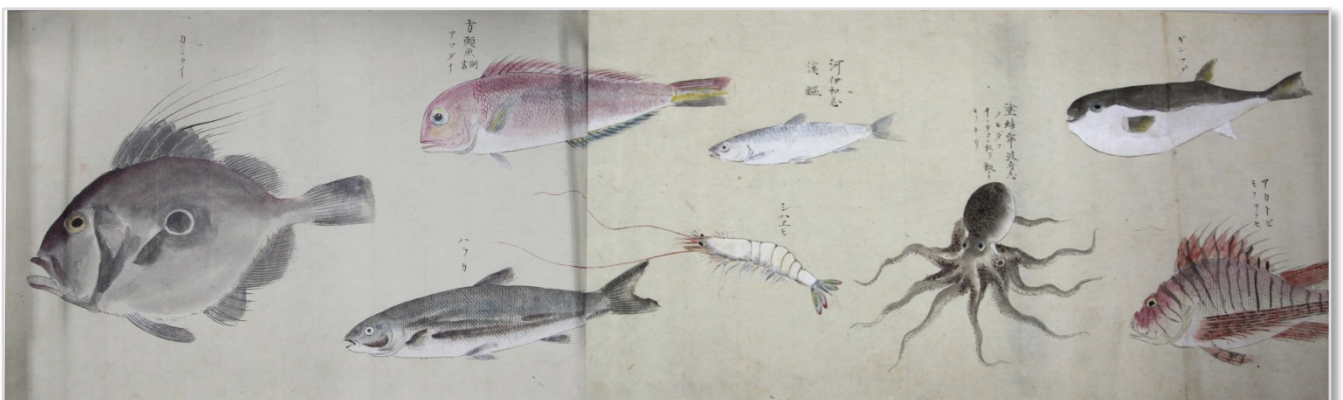
小野蘭山の孫、小野職孝による編著。様々な動植物や鉱石などをいろは順に分けた上で、土・草・蟲・魚・獸などの項目で分類する。膨大な 4『本草綱目啓蒙』に対して、索引の役割を果たした。漢語のみ対応する巻丁数が記してある。また日本各地の方言名も記す。展示箇所は巻 2 介部で「雅俗」に方言類を含む。小野蘭山は宝暦 3 年(1753)に京都で私塾衆芳軒を開いた本草学者で、寛政 11 年(1799)には幕府の要請で江戸に出、その後没するまで幕府医学館で教えた。弟子は 1000 人とも言われ、江戸時代の本草学に多大な影響を与えた人物である。(稲本)



6. [魚類図] ぎよるいず

魚類、写、1軸、縦27糎×全長329糎、書写者不明、成立年不明、489/094/5168。

江戸時代に作成されたと思われる魚類の図。題簽、署名、識語などなく詳細は不明。タイトルは仮題。絵柄や色調は飯沼慾斎『本草図譜』10巻「魚部」に似る。解説は『大和本草』や方言辞典『物類称呼』（1775）などを参考にしたか。19世紀以降の成立と思われる。冒頭よりトラフグ・アンコウ・ハタ・ヒラマサ・靴底魚（舌ヒラメ）・アカトビ（オコゼ）・クモダコ・カワイワシ・シマエビ・アマダイ・ハラカ・カガミダイ・カワハギ・トビウオ・クルマタイ・ヤナキノマイ・赤メバル・名称不明魚2種が収録される。（吉丸）



7. 本草図譜 ほんぞうずふ

本草、刊、半紙本縦 25.3×横 17.4 糎、93 巻索引 2 巻 95 冊、岩崎常正（灌園）著、大正 5 (1916)-11 年 (1922) 刊、(東京) 本草図譜刊行会発行、三重県師範学校旧蔵、470.3/I96

文政 11 年 (1828) に成立し、天保 1 年～弘化 1 年 (1830-44) に初版が刊行された。灌園は天保 13 年 64 冊の時点で死去、息子正蔵が 96 巻まで残りを完成させた。

2000 種類以上の本草を毒草、蔓草、器物などに分類し、それぞれ彩色した写生図を掲載する。本書大正 11 年刊版は、本編 93 巻に 2 巻 2 冊の索引の構成で、索引には本草の名称がいろは順ではなく 50 音順に並べられている。本書の本草は植物が大部分を占め、他の本草書に見られた鉱物などの記述はない。目録右下図「阿芙蓉」とはアヘンのことで、その採取方法などが記されている。左展示（目録左下図）の「緋ばい」「かごしまこう さつまこう」はそれぞれ梅の品種で、美しい絵と共に開花時期や特徴を記す。



右展示（目録右上図）「くわりん」は花梨のことで、オランダ語とラテン語での名称も併記するのが面白い。（稲本）



8. 草木錦葉集 そうもくきんようしゅう

本草、刊、大本縦 25.6×横 17.7 糎、8 巻 8 冊、水野忠敬著、関根雲停・大岡雲峰画、明治 13 年（1880）刊、（東京）内山長次郎版、（東京）北畠茂兵衛発兌、三重高等農林学校旧蔵、470.4/Mi96。

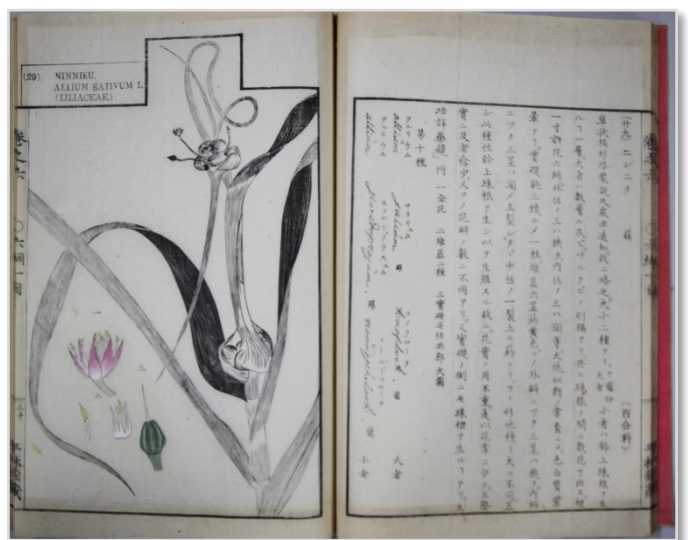
様々な斑入り植物の写生と形状や栽培法を記す。初版は文政 12 年刊で、本書は奥付を追加し、刊記を一部彫りかえた明治 13 年後印本である。緒巻・前編・後編の構成で、緒巻は栽培法など、前編後編では斑入りの草木を図付きで紹介する。展示部分では椿の葉の斑の形状ごとに名称がついている。左面の図から斑点の様子がよくわかり、右上から時計回りに「本所はつ雪」「古砂子」「ばん丁初ゆき」「べつ甲松初雪」「上多すなご」「糎や金砂子」。（稲本）



9. 新訂草木図説 しんていそうもくずせつ

本草、刊、大本縦 26.5×横 17.9 糎、20 巻 20 冊、飯沼慾斎著、田中芳男・小野職愨増訂、久保弘道・横川政利校訂、明治 8 年（1875）刊、（岐阜）平林荘飯沼龍夫蔵版、三重県尋常師範学校旧蔵、470/28/1-20

伊勢国亀山出身の医師飯沼慾斎による植物図鑑。草部 20 巻と木部 10 巻からなり、展示本は草部のみ。木部は北村四郎編注の昭和 52 年版（開架参考 470.3/I59/1-2）まで未刊。日本で初めてリンネ分類を用いた。初版は安政 3 年（1856）から文久 2 年（1862）の刊行。展示本は田中芳男・小野職愨 増訂の第 2 版（1875）。のちに牧野富太郎により増訂 3 版（書庫 470.3/I27/1-4）が刊行された。展示箇所は草部第 6 綱第 1 目ニンニク。彩色部は花の解剖図。西洋の植物学書を参考になっている。絵は慾斎自身が観察して描いたもの。（吉丸）



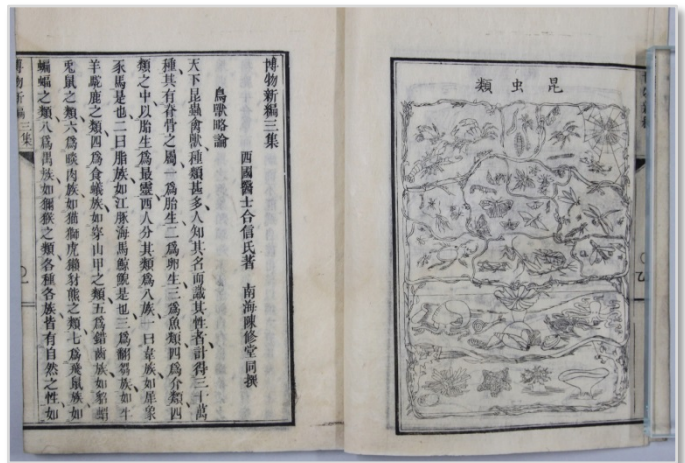
本草学から博物学へ

明治維新以降、動植物の活用を重視してきた本草学にかわって、ヨーロッパで発展した博物学が近代以降に本格的に入ってきます。江戸時代にヨーロッパの博物学は『草木図説』など部分的に取り入れられてきましたが、その影響は限定的でした。幕末より欧米から博物学者が来日するようになりました。明治4年(1871)には文部省博物局が開設され、明治14年に農商務省に所管がえになるまで、日本の博物学の発展を牽引しました。12『具氏博物学』の校閲者である田中芳男が中心的指導者でした。大学では明治10年に東京大学理学部に生物学科が創設され、米人モースが動物学教授、アメリカ帰りの矢田部良吉が植物学教授になりました。博物学は明治末にかけてさらに進展し、現代生物学へと転じていきます。(吉丸)

10. 博物新編 はくぶつしんぺん

博物、刊、初編1-3冊縦25.4×横17.7糎、2編4-5冊縦25.0×横16.5糎、初編3巻3冊、2編2巻2冊、初編西国医士合信著・南海陳修堂同撰、2編清国容兆倫著、初編刊年不明、2編明治9年(1875)刊、初編版元不明、2編(東京)大角豊次郎版、度会県学校課旧蔵。400/Y72/1-5。

合信とは入華医療宣教師ベンジャミン・ホブソン。容兆倫は清国広東省出身の来日中国人。自然神学の立場から自然科学の知識をまとめたもので、原本は1855年広州の刊行。原文に訓点をつけた和刻本が幕末に刊行されたほか、読み下しの『博物新編訳解』(1868-70)が刊行された。幕末から明治初期にたいへんよく読まれた自然科学入門書であり、明治5年の「学制」施行による上等小学校(10-14歳)の教科書となった。初編が3集、2編が2集よりなる。初編初集は地気論・熱論・水質論・光論・電気論よりなり、2集は天文、3集は動植物誌、4集は地学・力学、5集は植物・化学・人体である。(吉丸)



11. 博物教授法 はくぶつきょうじゅほう

博物、刊、縦 22.0×横 15.0 糎、3 巻 3 冊、島次三郎著、井出猪之助校訂（巻 3 のみ）、巻 1・2 明治 9 年刊、巻 3 明治 11 年(1878)刊、(大阪) 花井卯助・北尾禹三郎発行、「こくぶ」旧蔵、375.4/H19/1-3。

頭書「文部省新刊小学懸図」。「植物之部」「獣類之部・鳥類之部」「爬虫魚類之部・多節類之部」の 3 巻。第 1 巻・2 巻は明治 16 年の再版本。島次三郎が死去したため巻 3 は井出猪之助校正。文部省が小学校教材としていた「博物図」の懸図（掛軸式の教材）の注解本。「総括」にはまず分類を教え、それから名目を教えるように、また分類や名前だけを覚えさせるだけではなくなぜその分類になるのか理解させるよう、注意がある。(吉丸)



12. 具氏博物学 くしはくぶつがく

博物、刊、半紙本縦 21.6×横 14.6 糎、10 巻 10 冊、サミュエル・G・グッドリッチ著、須川賢久訳、田中芳男閲、(愛知) 川瀬代助・梶田勘助版、明治 8 年 (1875) 須川賢久凡例、明治 10 年刊、三重県師範学校旧蔵、460/G65/1-10。

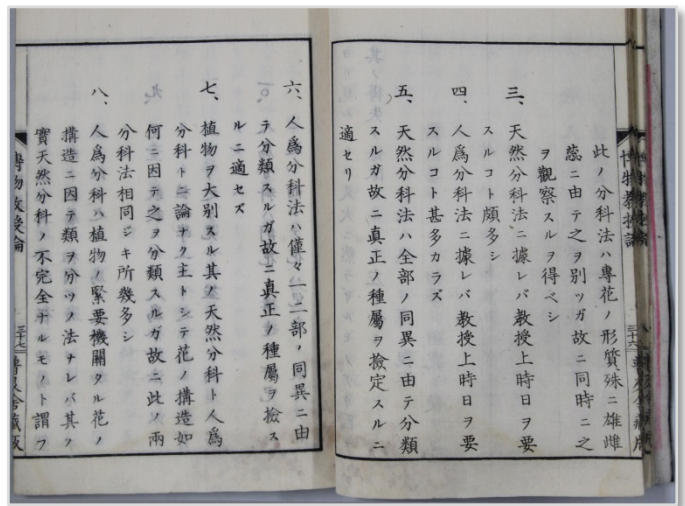
原著は米国の児童文学作家サミュエル・グリスウォールド・グッドリッチの” Pictorial Natural History Embracing a View of the Mineral, Vegetable and Animal Kingdoms, for the use of schools” (挿絵入り自然史) (1842 刊) であり、凡例によれば本書はフィラデルフィア政府による 1870 年版の翻訳。見返しの出版社は文部省。小学校（当時は 14 歳まで）で博物を教えるための教科書として翻訳された。天文・地理・鉱動植物・化学・地学など総合的な内容。小学校で教えるには範囲が広く、難解な印象がある。理科教育は当初は知識注入主義であったが、明治 10 年代後半から観察と実験を重視した内容に変わっていく。展示箇所は「綿樹」と「亜麻」。14『小学理科新書』と見比べて欲しい。



13. 博物教授論 はくぶつきょうじゅろん

博物、刊、縦 22.4×横 15.0 糎、1 冊、白井毅著、明治 18 年（1885）刊、（東京）普及舎発行。三重県師範学校旧蔵、375.4/Sh81。

小学校博物科の授業指導書。明治 12 から 19 年（1879-86）まで理科は「博物」「物理」「生理」「化学」「地文」にわかれていた。当時は小学校中等科（9-12 歳）で「博物」、小学校高等科（12-14 歳）で「博物学」を学んだ。動植物分類法の暗記的教授をいましめ、観察を重視する。植物全体の形質による分類（天然分科法）ではなく、花の形質とくにくにめしべおしべでの分類（人為分科法）を重視し、花やめしべおしべを観察することを勧めている。（吉丸）



14. 小学理科新書：甲種 しょうがくりかしんしよ こうしゆ

理科、刊、縦 22.8×横 15.1 糎、4 巻 4 冊（巻 3 欠）、学海指針社編、（東京）集英堂小林八郎発行、明治 26 年（1893）10 月刊、明治 24 年版の訂正再版、水谷善彦氏旧蔵、375.94/Sh95。

明治 24 年の第二次小学校令にもとづく高等小学校（10-14 歳）の文部省検定理科教科書。4 巻 4 冊で 1 巻が 1 学年に相当する。他に 2 年制高等小学校用の乙種教科書があった。明治 23 年の小学校令により尋常小学校では理科は実施されていない。天然物及び現象の観察ならびに理解を目的とし、動物・植物・物理・化学の知識が含まれる。巻 1・2 が動・植・鉱物、巻 3・4 が物理・化学・生理。児童の理解がしやすいように身近なものが取り上げられた。展示箇所は巻一（高等小学一年生用）の「わた（草綿）」と「あさ（大麻）」。12『具氏博物学』展示箇所比べるとより身近な解説になったことがわかる。（吉丸）



■ 参考文献

杉本つとむ『日本本草学の世界』八坂書房、平成 23、人文日語文 499. 9. Su38。

『彩色江戸博物学集成』平凡社、平成 6、書庫 460. 21. Sa22。

大場秀章『江戸の植物学』東京大学出版会、平成 9、開架 499. 9. 011。

国立国会図書館特別展示磯野直秀監修『描かれた動物・植物 一江戸時代の博物誌』国立国会図書館、平成 17、書庫 460. 2. E48。

上野益三『日本博物学史』平凡社、昭和 48、書庫 460. 21. U45。

八耳俊文「幕末明治初期に渡来した自然神学的自然観：ホブソン『博物新編』を中心に」(青山学院女子短期大学総合文化研究所年報 4, 127-140, 1996-12-10)。

『国史大辞典』吉川弘文館、昭和 58-平成 9。

日本古典籍総合目録データベース <http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html>

富山大学 伝統医薬データベース <http://dentomed.u-toyama.ac.jp/ja/>

— 後 記 —

本展示の企画・制作は本図書館研究開発室兼務教員の人文学部吉丸雄哉准教授が行いました。解説・解題執筆は吉丸雄哉准教授と人文社会科学研究科大学院生稲本紀佳が行いました。展示品はすべて附属図書館の所蔵本です。

本草学から博物学へ 展示資料目録

発行 三重大学附属図書館

平成 27 年 12 月 3 日

この目録はインターネットからもお覧になれます。

URL http://www.lib.mie-u.ac.jp/r_and_d/research/exhibit/honzo.pdf